

中世のサムライヒーロー

楠公さんを 知ろう

第3回

楠木正成の魅力を探る ～奥河内に生まれた「人を想う心」～



▶寄手塚

阪南大学 国際観光学部 准教授 和泉大樹

今回は、楠木正成に関する「伝承」を取り上げてみようと思う。

千早赤阪村の森屋墓地には2基の石づくりの五輪塔がある。北側にある塔は高さ約1・8^{メートル}で、その形態から鎌倉時代後半のものと考えられ、南側にある塔は高さ約1・3^{メートル}で、繊弱な感じから、南北朝時代の造立と考えられている。

両塔は、正成が赤阪城や千早城などの戦いで亡くなった人々を供養する目的で造立したと伝わり、正成の思いやりや慎み深さから、自軍＝味方の塔よりも

幕府軍＝寄手の塔を「少しだけ大きく建てた」という「伝承」がもととなり、それぞれ「寄手塚」・「身方塚」と呼ばれている。

残念ながら、両塔の造立時期が異なっていることから、後々に付加された伝承であることは否めない。

しかし、この伝承は忘れられることなく、人が、地域が、今日まで伝え続けてきたのである。伝えるに足

るだけの魅力があったのであろう。そして、人々が感じたその魅力とは、正成の「想う心」ではなかったか。

腕が良いと評判の大江

は、心地良く住んでくださる方を想いながら家を建てるのであろう。行列ができるスイーツ店のパティシエは、美味しいと喜んでくださるお客様を想いながらスイーツをつくるのであろう。父や母たちは、いつも家庭を想うのであろう。

人生の豊かさは、誰かのことをどれだけ「想う」かで決まるのかもしれない。

正成は伝承というフィルターを通して、時代を超えて「人を想う心」の大切さ、素晴らしさを伝えてくれているように思う：とは、言葉が過ぎるだろうか。